

# ガ行鼻音の学習による発話や意識への影響

本 橋 楓

## 1. はじめに

### 1.1 研究目的

現在、東京をはじめとするガ行鼻音地域において、若年層話者を中心にガ行の「非鼻音化」が急速に進んでいるとされている。自らの発話状況をはじめ周囲のほとんどが、ガ行非鼻音を主に発話していることを実感する中で、現代人の発話にガ行鼻音がどれくらいの割合で存在するのか、またその影響の根源を、今回改めて調査し考察していきたいと考えた。

ガ行鼻音に関する先行研究の多くは、インフォーマントの出身地が、ガ行鼻音地域なのか否かを基準とし、インフォーマントがこれまで過ごしてきたことのある地域言語からの影響を重視して結論が導かれている。しかし、ガ行非鼻音地域出身者やガ行鼻音を持たない地域で過ごしてきた人物であっても、国語の授業内での音読や、声楽・演劇での発声の際などの教育により、ガ行鼻音を習得することは十分に可能である。学習によるガ行鼻音の習得が、その後の自然発話にも影響を与える可能性は多いに考えられるのではないだろうか。

本稿はこの仮定をもとに、ガ行鼻音と教育との関係性を掘り下げ、学習によるガ行鼻音の習得がもたらす、発話への影響やつながりを明らかにすることを目的とする。

### 1.2 研究内容

自身で作成したアンケートの調査結果をもとに、比較考察する。対象は出身地域や年齢を限定せず、幅広い年齢層とさまざまな地域出身者のデータを収集した。ただし、今回は東京方言におけるガ行鼻音について中心に調査語彙を作成したため、インフォーマントの現居住地に関しては、関東地方のみという条件を付けてデータを収集することとした。

また今回は、音楽教育などの影響でガ行鼻音を新たに習得しているか否かを明らかにするため、インフォーマントに、これまでガ行鼻音に関する教育を受けたかどうかを問う内容とした。ガ行鼻音を発音しているかどうかの発音調査に加え、ガ行鼻音に対する認知覚調査、また、ガ行鼻音学習の有無を含む意識調査を行った。

合唱・声楽の経験者や音大の学生に対しても同じ内容の調査を行って、ガ行鼻音の教育を受けたことのないインフォーマントとの比較を行うこととした。

理由としては、音楽教育の中で、特に合唱や声楽を指導する際、ガ行鼻音を意識させる指

導がなされる場合が非常に多く存在するためである。この比較調査は、自身のこれまでの音楽経験から考察し、取り入れることとした。

## 2. 調査方法

### 2.1 〈発音調査〉

語中にガ行子音を含む単語、助詞「が」を含んだ短文などを示し、読み上げてもらったものを録音する形をとった。ガ行鼻音に加え、ガ行非鼻音を含むものも調査語彙に追加し、それらをランダムに構成することによってガ行鼻音の出現率を調査する。

調査語彙は、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）を含む、4つのアクセント辞典の記載に従って作成した。インフォーマントには、ガ行鼻音の説明をした後に発音調査を行ったが、自然発話になるべく近い形で調査ができるよう心掛けた。

#### ○調査語彙

ガ行鼻音：柳、十五夜、管楽器、中学校、七五三、葉書、源五郎、人間界、ダイニング、マンゴー

ガ行鼻音・非鼻音どちらでも発話される語：不合格

助詞の「が」とガ行鼻音を含む単語で構成された文：

願いがかなう、本がある、人混みにまぎれる、すごい音がする、5時頃会いましょう

ガ行非鼻音：科学技術、ハンバーガー、朝ごはん、林間学校

#### ○調査語の引用元について

調査語はアクセント辞典で共通語において「ガ行鼻音で発音される語」また「ガ行鼻音・非鼻音どちらでも発話される語」の例として記載されている語から抜粋したものである。下記に、引用元を示す。

『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）十五夜、科学技術、管楽器、中学校、不合格、七五三、葉書、源五郎、人混み、すごい、5時頃、ハンバーガー、朝ごはん、林間学校

『全国アクセント辞典』（1960）十五夜、中学校、不合格

『新明解日本語アクセント辞典 第2版』（2017）柳、十五夜

『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』（1998）十五夜、七五調

#### ○「人間界」「ダイニング」「マンゴー」に関して

辞書に記載のない調査語に関しては、今回実験的に追加した。

人間界…「語中・語尾では、「ガ行鼻音」が現れる」という『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）の記載を基に、ガ行鼻音で現れる単語であると予想した。

ダイニング…「原語〔＝外来語の流入元〕で鼻音のものは、「ガ行鼻音」で現れる」という『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）の記載を基に、「ガ行鼻音」で現れる

単語であると予想した。

マンゴー…「ダイニング」同様、「原語〔＝外来語の流入元〕で鼻音のものは、「ガ行鼻音」で現れる」という『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）の記載を基に、「ガ行鼻音」で現れる単語であると予想した。

## 2.2 〈知覚調査〉

知覚調査の調査語彙に関しても、発音調査と同様、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）を含む、4つのアクセント辞典の記載に従って作成している。

語中にガ行子音を含む単語と、短文を提示し、ガ行鼻音と非鼻音の2通りに発音した音声 を2度流し、共通語として正しい発音だと思う方を選んでもらう。なお、知覚ができなかった場合を考え、「わからない」という選択肢も用意した。

知覚調査では、単語のみでなく短文を加えることにより、そこに聞こえ方の差があるのかどうか調査するような形とした。単語ではガ行鼻音に対し嫌悪を感じる場合であっても、ガ行鼻音が含まれている短文に関しては違うとらえかたがされる可能性がある。その点についても調査する。

### ○調査語彙

ガ行鼻音：春霞、七五調、飛行機雲、株式会社、鏡、口喧嘩、雨雲

ガ行非鼻音：カラ元気、白ごま

ガ行鼻音を含む単語で構成された文：会議にはたくさんの国々が参加した  
道を横切る形で移動する  
日本の冬景色は非常に魅力的である

### ○調査語の引用元について

調査語はアクセント辞典で共通語において「ガ行鼻音で発音される語」また「非鼻音で発音される語」の例として記載されている語から抜粋したものである。下記に、引用元を示す。  
『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）七五調、飛行機雲、株式会社、雨雲、カラ元気、白ごま、冬景色

『全国アクセント辞典』（1960）七五調

『新明解日本語アクセント辞典 第2版』（2017）春霞、七五調、株式会社、口喧嘩、国々、横切る

『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』（1998）鏡

## 2.3 〈意識調査〉

意識調査は、以下の項目についてアンケート形式で行う。

- ①日常生活で鼻濁音を使っていると思うか。

- ②鼻濁音の発音は、共通語として正しいと思うか。
- ③これまで、鼻濁音について教育を受けたことがあるか。

教育を受けたことがある場合は、教育を受けた年代（小学生のとき、中学生のとき、高校生のとき、大学生のとき）、指導場面（合唱指導の際、国語の音読の際など）、その指導方法（ガ行の前に小さいnをいれなさいと言われた。など）について具体的に記入してもらった。また、その教育を受けたことにより、ガ行鼻音が使用できるようになったか否かも問うことにした。

- ④ガ行鼻音の発音は、ガ行非鼻音と比べてどのように感じるか。
- ⑤今後、ガ行鼻音を共通語として使うべきだと思うか、それとも使う必要はないと思うか。また、それはなぜか。理由を具体的に記述。

これら項目の他に、年齢、出身地、現住居地、出身地と現住居地以外に1年以上住んだことのある地域についての情報を記入してもらった。

調査は以上の発音調査、知覚調査、意識調査をすべて総合させたデータをもとに結果を導くものとする。

### 3. 調査のインフォーマントについて

#### ・年齢

9歳～90歳までの男女合わせて80名（男性：21名 女性：59名）

年齢：9歳1名、10代6名、20代37名、30代7名、40代17名、50代7名、60代2名、80代2名、90代1名

#### ・出身地（言語形成期を過ごした地域）

東京都22名、神奈川県13名、埼玉県9名、千葉県5名、静岡県4名、茨城県3名、愛知県、高知県、山梨県、富山県、兵庫県、福島県、それぞれ2名ずつ

青森県、秋田県、愛媛県、京都府、群馬県、栃木県、長野県、広島県、福井県、福岡県、北海道、韓国、それぞれ1名ずつ

#### ・調査期間

2018年6月から2018年11月までの間に行った。

### 4. 全体の調査結果

#### 4.1 発音調査結果

それぞれの調査語について、調査結果をパーセンテージで以下の表にまとめた。

上段の「○」の列はそれぞれの語をガ行鼻音を用いて発音したインフォーマントの割合、下段の「×」の列は、ガ行非鼻音を用いて発音したインフォーマントの割合である。（表1）

表 1

	柳	十五夜	科学技術	管楽器	中学校	不合格	七五三	葉書	源五郎	ハンバーガー	朝ごはん
○	8.75%	8.75%	7.5%	15%	7.5%	6.25%	7.5%	12.5%	6.25%	6.25%	0%
×	91.25%	91.25%	92.5%	85%	92.5%	93.75%	92.5%	87.5%	93.75%	93.75%	100%
	林間学校	人間界	ダイニング	マンガ	願いが かなう	本がある	人混みに まぎれる	すごい 音がある	5時頃会 ましょう		
○	21.25%	21.25%	15%	16.25%	10%	48.75%	6.25%	10%	5%		
×	78.75%	78.75%	85%	83.75%	90%	51.25%	93.75%	90%	95%		

すべての語において、ガ行非鼻音で発音された割合が、ガ行鼻音で発音された場合を上回っていた。しかし、ガ行鼻音の発音を保つインフォーマントは一定数存在していることも明らかとなった。現在、ガ行鼻音保有率が高いひとの特徴として、「ガ行鼻音」と「ガ行非鼻音」の境目が曖昧になっていることが挙げられるだろう。また、「本がある」の助詞の「が」については半数に近いインフォーマントが、ガ行鼻音で発音するに至ったことから、ガ行の前の音が「ん」である場合、鼻音になりやすいという傾向も確認することが出来た。

#### 4.2 知覚調査結果

それぞれの調査語について、調査結果をパーセンテージで以下の表にまとめた。

「ガ行鼻音」の列は、インフォーマントがその語について、ガ行鼻音の方が聞き心地が良く感じた」と答えた割合。「ガ行非鼻音」の列は、ガ行非鼻音の方が聞き心地がよいと答えた割合である。「わからない」に関しては、インフォーマントが、ガ行鼻音での音声と、ガ行非鼻音での音声の区別がつかなかった割合を表している。(表 2)

表 2

	春霞	七五調	飛行機雲	株式会社	鏡	口喧嘩	雨雲	カラ元気	白ごま
ガ行鼻音	30.0%	26.25%	40.0%	53.75%	26.25%	35.0%	27.5%	20.0%	17.5%
ガ行非鼻音	67.5%	68.75%	57.5%	40.0%	65.0%	62.5%	67.5%	77.5%	82.5%
わからない	2.5%	5.0%	2.5%	6.25%	8.75%	2.5%	5.0%	2.5%	0%

知覚調査では、ほぼすべての調査語において、「ガ行鼻音の音声よりも、ガ行非鼻音の音声の方が聞き心地が良い」と答えたインフォーマントの割合が50%を優に超え、圧倒的差を示す結果となった。しかし、「株式会社」のみ例外であり、これは自ら発話する機会よりも、アナウンサーなどが発話するガ行鼻音を使用した「株式会社」の音声を耳にしているからではないかとの結論を導いた。

### 4.3 意識調査

意識調査では、好意的な反応が若干多くはなっているものの、中立的な意見と、嫌悪感を覚えるという意見とを合わせると半数以上となり、ガ行非鼻音話者の半数はガ行鼻音の音自体を積極的に取り入れるような意識は無く、必要ないものであるとして意識する傾向にあることがわかった。しかし、個人のアイデンティティーを否定してまで発音を変化させる必要はないという考えを持つ人が多数を占め、ガ行鼻音が完全に排除されるべきとは考えていないことも明らかとなった。

## 5. 専門的な指導を受けているインフォーマントの調査結果について

### 5.1 声楽・合唱経験者にみられる傾向

以下に、声楽・合唱などを専門的に学習・あるいは指導しているインフォーマントについてまとめた。(表3)

表3

性別	年齢	声楽・合唱経験	鼻音出現率	出身地
女	59	◎	80%	青森県八戸市
男	31	○	55%	神奈川県川崎市
女	20	◎	25%	神奈川県川崎市
男	21	◎	20%	神奈川県川崎市
女	24	○	20%	福島県喜多方市
女	18	◎	15%	神奈川県秦野市
女	23	◎	15%	兵庫県芦屋市
女	22	◎	15%	神奈川県横浜市
男	20	◎	15%	富山県高岡市
男	24	○	15%	福島県会津若松市
女	22	◎	10%	北海道河西郡
女	21	○	5%	神奈川県厚木市
女	21	◎	5%	東京都西東京市
男	23	◎	5%	埼玉県川口市
女	22	◎	5%	東京都板橋区
女	22	◎	5%	福井県福井市
女	33	○	5%	長野県岡谷市
女	21	◎	0%	群馬県桐生市
女	21	◎	0%	神奈川県二宮町
女	21	◎	0%	埼玉県坂戸市
女	22	◎	0%	茨城県筑西市
女	21	◎	0%	東京都練馬区
女	21	◎	0%	埼玉県草加市

#### ※声楽・合唱経験について

- 今現在、音楽大学にて声楽を学習している学生と指導者
- 音楽大学以外での団体で、合唱を趣味としている人

以上は、本調査対象80名中23名のインフォーマントである。23名中21名は、鼻音出現率が25%以下となっており、2名を除いて出現率が比較的低いインフォーマントが大半を占めている。

出現率が非常に高く80%を示しているインフォーマントは、青森県出身のE氏である。E氏に関しては、青森県（ガ行鼻音地域）出身であることに加え、音楽大学声楽科出身者であり、現在、合唱の指導を行っている人物ということもあり、出現率が非常に高くなっていると考えられる。E氏については、後ほど詳細に分析することとし、ここでは、E氏を除いた22名のインフォーマントについて考察していきたい。

### 5.2 専門的な音楽指導を受けている若年層と、指導を受けていない若年層との比較

音楽教育とガ行鼻音との関係を探るために、声楽や合唱の専門的な音楽指導を受けている若年層と、指導を受けた経験の無い若年層の両者のデータを比較していく。ここでの若年層は、20代までの男女とし、具体的な数値を用いながら、以下に考察する。

今回の調査において、専門的な音楽指導を受けたことのない若年層のインフォーマントは23名で、その中でガ行鼻音が表れたインフォーマントは7名であった。一方、専門的な音楽指導を受けている若年層のインフォーマントは20名で、そのうち14名が、ガ行鼻音が表れていることがわかった。

専門的な指導を受けたことのない若年層の場合、ガ行鼻音使用者の割合が全体（23名）の30.4%であったのに対し、専門的な指導を受けている若年層は、全体（20名）の70%がガ行鼻音を使用していた。

これらの結果から、専門的な音楽教育を受けている若年層のガ行鼻音使用割合が、そうでない若年層を圧倒的に上回っていることが明らかとなった。では、専門的な音楽教育を受けているうえで、ガ行鼻音が出現している14名の具体的な個別のガ行鼻音出現率はどうなっているのか。改めて以下にまとめる。

鼻音出現率（全）	人数
25%	1名
20%	2名
15%	5名
10%	1名
5%	5名

14名のうち、最高出現率は25%で、最低出現率は5%である。それぞればらつきがあり出現率の傾向に特徴的な点は見られなかった。

以上の結果から、専門的な指導のもと声楽や合唱などの音楽教育をうけた場合、出現率にばらつきは認められるものの、自然発話の中にガ行鼻音が現れる率が、指導を受けない人よりも高くなることを明らかにすることが出来た。

### 5.3 E氏を除いた、鼻音出現率上位2名についての考察

次に出現率が55%と25%の2名について考察していきたい。2名の共通点としてあげられるのは出身地、現居住地共に神奈川県川崎市である、ということである。また、それぞれ、部活動や学校の合唱の授業でガ行鼻音について学習したとしていた。

『新日本言語地図』（2016）によると、神奈川県川崎市はガ行鼻音を保持している地域ということが確認できる。しかし、今回行った調査では、若年層を中心にガ行非鼻音化が進みつつあることが確認できた地域でもある。

以下の表に、専門的な音楽指導を受けている2名を含めた、神奈川県出身者全員の出現率結果を示した。

神奈川県

鼻音出現率	人数	年代
0%	4名	20代以下3名 40代1名
5%	2名	20代2名
15%	4名	20代以下4名
20%	1名	20代
<u>25%</u>	1名	20代
<u>55%</u>	1名	30代

ここに照らし合わせるとわかるのが、今取り上げている「出現率55%と25%の合唱経験者であるインフォーマント2名」が他の神奈川県出身者と比べ出現率が高い結果となっていることである。

ここからは、それぞれの調査結果の詳細を示しながらその傾向を探る。

#### 出現率55% 31歳男性

〈知覚調査結果〉

○ガ行鼻音の発音を支持した語と文

春霞、飛行機雲、株式会社、鏡、雨雲、白ごま、文①、文②、文③

○ガ行非鼻音の発音を支持した語

七五調、口喧嘩、カラ元気

この男性の場合、単語の知覚に関しては、ガ行鼻音の発音を支持する傾向が若干みられるものの、確実な傾向として読み取ることはできなかった。しかし、短文の知覚に関しては、すべてガ行鼻音で発音されたものを支持していた。

〈意識調査結果抜粋〉

問9：鼻濁音の発音は、非鼻濁音と比べてどのように感じますか？

答：まるやか。流れがある。

問10：今後、鼻濁音を共通語として使うべきだと思いますか？それとも使う必要はないと思いますか？（a, b, c, d から選択）

c. 鼻濁音と非鼻濁音のどちらを共通語として使っても構わない。

答：言葉は時代、地域で使いやすく変容していくものだと思うから。

知覚調査、意識調査を含め、ガ行鼻音に対し、中立的な立場であるということが見て取れた。30代で55%の出現率をしめしている要因は、長年の合唱経験と、音楽指導経験が深く関係しているのではないかと考えられる。

出現率25% 20歳女性

〈知覚調査結果〉

○ガ行非鼻音の発音を支持した語と文

春霞、七五調、飛行機雲、株式会社、鏡、口喧嘩、雨雲、カラ元気、白ごま、文①、文③

○わからないと回答されたもの

文②

知覚調査の結果は、短文②の「わからない」という回答を除いたすべてにおいて、ガ行非鼻音を支持する結果となった。

〈意識調査結果抜粋〉

問9：鼻濁音の発音は、非鼻濁音と比べてどのように感じますか？

答：遠くまで言葉がわかりやすくなる感じ。

問10：今後、鼻濁音を共通語として使うべきだと思いますか？それとも使う必要はないと思いますか？（a,b,c,d から選択）

b. 鼻濁音を共通語として使う必要はない。

答：歌の時は鼻濁音を使用するが、日常的に使うと、少し違和感を感じる。使う必要はない。

中立的だった31歳男性とは違い、出現率25%20歳女性は調査全体を通して、ガ行非鼻音を支持する立場を示していた。それでも出現率が他の若年層に比べて比較的高いことを考えると、声楽の経験が少なからず発話に影響しているということも考えられるのではないだろうか。

#### 5.4 音楽教育指導者である、E氏の意識調査結果についての考察

では、青森県出身のE氏について、知覚調査と意識調査を踏まえて考察する。

##### E氏

〈知覚調査結果〉

○ガ行鼻音の発音を支持した語と文

春霞、七五調、飛行機雲、株式会社、鏡、口喧嘩、雨雲、文①、文②、文③

○ガ行非鼻音の発音を支持した語

カラ元気、白ごま

知覚調査の結果、ガ行非鼻音で発音するとされる「カラ元気」「白ごま」を除いた調査語について、ガ行鼻音の発音を支持していることが明らかとなった。これはアクセント辞典の記載通りの結果であり、ガ行鼻音と非鼻音との区別が非常に明確であることがわかる。

〈意識調査結果抜粋〉

問9：鼻濁音の発音は、非鼻濁音と比べてどのように感じますか？

答：日本語の言葉のイントネーションから考えて、自然に聞こえる。発音しやすい。

問10：今後、鼻濁音を共通語として使うべきだと思いますか？それとも使う必要はないと思いますか？（a,b,c,dから選択）

a. 鼻濁音を共通語として使うべきだ。

答：自然な日本語のイントネーションで話すようにする為には、鼻濁音は必要なものだと思います。

調査全体を通して、ガ行鼻音に強い思い入れを持った上で非常に意識が高いことがわかる。東北地方出身者であるということから、言語形成期にガ行鼻音を自然に習得し使用していると考えられる。なお、学生時代に専門的な音楽教育を受けているものの、ガ行鼻音について教育を受けたことは一度もないと話していた。

E氏は小学生から高校生までが在籍する音楽教室で、合唱を長年指導し続けている教師であるため、ガ行鼻音の指導方法について、具体的に回答してもらった。その指導方法としては、「真似をさせる」というものである。「が、の前に小さいnをいれなさい」と指導され

たインフォーマントが多く見られる中、E氏は、その指導方法を取らないということであった。その理由としては、「耳で発音を聞いて真似してもらう方が、正しい発音が伝わると考えるため」とのことだった。

また、歌唱の際にガ行鼻音を使用する理由としては「日本語の正しい発音で日本歌曲を歌うため」ということを挙げている。これは、専門的な音楽教育を受けている若年層のインフォーマントが鼻濁音を使う理由の「きれいだから」という漠然とした回答とは全く違うものであり、ここに、指導者と生徒の認識の違いを確認できた。

## 5.5 音楽教育でのガ行鼻音の認識と指導の問題点について

今回、本調査と同時に、専門的な音楽指導を受けているインフォーマントに対し、「なぜ歌唱の際に、鼻濁音を使用しているのですか？」という質問を投げかけた。そこで得た回答は以下のとおりである。

- ①日本歌曲で鼻濁音を意識している。きれいだから。
- ②先生から、正しい発音だという理由で指導された。
- ③日本歌曲の歌詞に、助詞の「が」があるときガ行非鼻音を使うと、アクセントがついたような歌い方になってしまうため。

ほぼ全員、①の「鼻濁音の方がきれいだから」という理由を真っ先に答えるような結果となった。また、日本歌曲以外（海外の歌曲）では、ガ行鼻音を意識することはほぼありえないということである。

「きれい」という漠然としたイメージのもと、ガ行鼻音を使用しているインフォーマントがほぼ100%であることを考えると、指導者が、ガ行鼻音で発音されるべき単語が存在する明確な理由を告げないまま、ガ行鼻音の発音の仕方のみを習得させることに集中してしまっていることに、その原因が考えられる。

本調査全体の意識調査の中で、ガ行鼻音の指導を受けた際、どのように教えられたか尋ねた項目では、「が、の前に、小さいnをいれなさい」という回答が圧倒的多数であったことも、これを裏付ける結果だと言えるだろう。

また、②の「正しい発音だと指導を受けたから」という回答者に対し、「正しい発音とは具体的にどういう発音ですか？」とさらに問いかけたところその返答は「日本語的に正しいということだけで、具体的なことはわからない」というものであった。このことから、さきほどと同じ、指導者の具体的な説明のない指導が要因であることが考えられるだろう。

ただ、その指導法が良いか悪いかを判断するのは非常に難しい。歌唱指導は、あくまでも発声の仕方などを重視した実技的な指導であり、限られた時間の中でガ行鼻音の法則などを説明するのは難しい。また、指導者自身も、ガ行鼻音に対しての詳しい知識がない可能性も大いに考えられる。

続いて、これまでに述べてきた回答以外にみられたものを紹介する。

- ④数字をふくむ単語には鼻濁音は使わないと教えられた。

⑤日本語の発音は重視していない。響きを重視している。

④の回答は、歌唱指導の際のガ行鼻音の扱いが垣間見られる回答である。『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016)の中に「数詞の「5 (五)」は、語中・語尾であっても「ふつうのガ行音」があらわれる」という記載があるように、数詞の場合はガ行非鼻音で発音されることが正しいとされている。しかし、この回答を具体的にみると「十五夜は鼻濁音を使わないと思います」という返答があった。『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016)においては「語源としては「5 (五)」であっても数詞としての役割・意識が薄れたものは、「ガ行鼻音」で現れる」としたうえで、「十五夜」がその例としてあがっている。そのことをふまえて考えると、「数字をふくむ単語には鼻濁音は使わない」という認識があることは、十五夜の「十五」を数字として扱わず、「十五夜」という一単語として解釈していることがわかる。

また、⑤の回答は、①と同じように音楽教育を受ける若年層のインフォーマントほぼすべてにあてはまる認識のようで、日本語の発音ではなく、音楽の美しさを追求するうえでガ行鼻音を使用している実態を明らかにすることが出来た。

## 6. 今後のガ行鼻音教育の変化について

ガ行鼻音の衰退に関して、昭和前期頃からさまざまな調査をとおして予想されていることは知られるとおりであるが、その衰退を遅らせるための方法が教育現場ではたして試されてきたのだろうか。

ガ行鼻音の音声教育が変化しつつある例として、NHKの教育番組「にほんごであそぼ」から2016年に発表された『華麗に鼻濁音』について言及したい。

これは作詞：うなりやべベン 作曲：祐天寺浩美として発表された歌で、鼻濁音をテーマに、ガ行鼻音の美しさを表現したものとなっている。「ちーむ☆ひこ星」とされる男子ユニットが踊りながら歌うもので、その画面表記には、「カ° キ° ク° ケ° コ°」の表示も加えられている。本番組の狙いとして

「2歳から小学校低学年くらいの子どもと親を対象に制作しています。番組を通して、日本語の豊かな表現に慣れ親しみ、楽しく遊びながら『日本語感覚』を身につけてもらうことをねらいとしています。それが、コミュニケーション能力や自己表現する感性を育てると考えるからです。狂言の「型」など日本の伝統芸能の手法を取り入れつつ、子ども番組ならではの演出も最大限に活かしています。」

ということがホームページ上に記載されていることを加味すると、言語形成期の子供たちに鼻濁音を習得させることを目的としているとも考えられる。

2010年代後半に差し掛かったと同時に、ガ行鼻音の音素に関する認識や教育が大きく変化してきている今、ガ行鼻音がこのまま衰退してしまうのか、それとも再認識されていくのか、その分かれ道に差し掛かっているとと言っても、過言ではないだろう。

## 7. まとめ

本稿では、ガ行鼻音と音楽教育との関係性を明らかにすることを軸に、ガ行鼻音の現状を調査した。

専門的な音楽指導を受けている若年層と、指導を受けていない若年層とのガ行鼻音出現率を比較した結果からは、専門的な指導のもと声楽や合唱などの音楽教育をうけた場合、出現率にばらつきは認められるものの、自然発話の中にガ行鼻音が現れる率が、指導を受けない人よりも高くなることを明らかにすることができた。

ガ行非鼻音は衰退する一方であると叫ばれながらも、ガ行鼻音が出現している人は若年層にも存在し、また、専門的な音楽教育が、個人のガ行鼻音出現率を高めることが出来る可能性があることを今回示すことができた。年代や地域が平等になるよう一定数のインフォーマントを集めることが難しかったうえに、ごく小規模な範囲での調査となったため、すべての結果が正確なものと言えるわけではない。

ガ行鼻音はいずれなくなってしまうとしながらも、今まで野放しにされてきた「ガ行鼻音の再認識」という課題において、NHKの教育番組をはじめとしたあらたな教育方法で再起を図ろうと立ち上がる研究者の存在は非常に頼もしい。今後も、ガ行鼻音がどのような変化をたどっていくのか、注意深く観察していきたい。

## 参考文献

### 【論文・著書】

- ・大西拓一郎 (2016) 『新日本言語地図』—分布図で見渡す方言の世界—
- ・沖森卓也, 木村一 (2017) 『日本語の音』朝倉書店
- ・尾崎喜光 (2015) 「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要』巻39号 p.151-168
- ・加藤正信、松本宙 (2007) 『昭和前期日本語の問題点』(国語論究; 第13集). 明治書院
- ・川本栄一郎 (1990) 「幕末の『獄中記』に見られるガ行鼻濁音表記とその系譜」148頁～181頁『文字・音韻の研究』国語論究2 明治書院
- ・金田一春彦 (1967) 「8. ガ行鼻音論」『日本語音韻の研究』東京堂出版
- ・国語調査委員会 (1905) 『音韻分布図』国書刊行会 注記 明治38年刊の複製
- ・国立国語研究所 (1975) 『日本語と日本語教育—発音・表現編—』国語シリーズ別冊3
- ・陣内正敬 (1992) 「地方におけるガ行鼻音意識：関西と九州における大学生アンケート調査より」『言語文化論究3』pp.77-84、九州大学言語文化部
- ・杉藤美代子 (1990) 『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻 (下)』明治書院
- ・中東靖恵 (2000) 「若年層ガ行非鼻音話者のガ行鼻音に対する意識：岡山大学学生に行った調査の結果から」『岡山大学言語学論叢7号』p.1-p.30
- ・轟木靖子・河野葉子 (2004) 「放送におけるガ行鼻濁音について：アナウンサーの意識調査に基づく考察」『香川大学教育学部研究報告』第I部122、p.47-p.58

### 【辞典】

- 『全国アクセント辞典』(1960) 東京堂出版
- 『国語学大辞典』(1980) 国語学会編東京堂出版
- 『新明解日本語アクセント辞典』(2002) 三省堂

『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(2016) NHK 放送文化研究所編 NHK 出版

『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』(2016) NHK 放送文化研究所編日本放送出版協会

【その他】

- ・「国立国語研究所 (NINJAL)」『国語研教授が語る「濁る音の謎」(1) 鼻濁音  
<https://www.youtube.com/watch?v=amscTH7z3iM> (最終閲覧日 2019.05.23)
- ・「にほんごであそぼーキッズワールド NHK E テレ こどもポータル」  
<http://www.nhk.or.jp/kids/program/nihongo.html> (最終閲覧日 2018.12.15)

